



コミュニティー・エンゲージメント・プログラム 2006 ベトナム

企画実施報告書

期間：2006年12月22日～31日

目次

企画概要	・・・	2
ツアー・スケジュール	・・・	3
企画参加アーティスト	・・・	5
各訪問校・施設での活動内容	・・・	6
今後の課題	・・・	19
付録：① 各公演プログラム	・・・	21
② 記事掲載紙一覧	・・・	24

コミュニティー・エンゲージメント・プログラム 2006 - ベトナム 概要

特定非営利活動法人ミュージック・シェアリングでは、近年ますます望まれる若手音楽家の社会貢献活動への意識と経験を、実体験を通じて認識するための新たな企画として、「コミュニティー・エンゲージメント・プログラム」を立ち上げることになりました。

理事長の五嶋みどりが提唱するコミュニティー・エンゲージメント（Community Engagement）とは、アウトリーチ活動のコンセプトをさらに推し進めたもので、“提供者・受容者”という立場を越えて関わる人間全てが積極的に参加し協力しあうことによって人と社会・地域の結びつきを強め、お互いの意識や知識を高めあっていく活動を意味します。音楽の分野では、演奏家と社会が感動を共有し、音楽の素晴らしさを分かち合う活動となります。普段、西洋音楽などの音楽芸術に生で触れる機会が限られている人々に音楽を届けることを通じて、交流をはかることを目的としています。この度のプログラムでは、ヴァイオリニストの五嶋みどりと、オーディションにより選ばれた若手音楽家3名の計4名がアンサンブルを結成し、ベトナム各地の学校・施設を訪問して演奏活動等を行いました。

また、ハノイ国立音楽院、及びホーチミン国立音楽院でコンサートを行ったほか、両音楽院の学生・若手指導者にも参加してもらい、演奏ツアーに同行して一緒に演奏するなど、その活動に直接参加することによって地域社会貢献活動を一緒に学び、体験していただきました。

<主催>： 特定非営利活動法人 ミュージック・シェアリング

<協賛>： 全日本空輸株式会社

<助成>： 財団法人 民主音楽協会

<協力>： ベトナム文化情報省舞台芸術局、ハノイ国立音楽院、ホーチミン国立音楽院
Prof. Nguyen Thi Bich Ha（ベトナム貿易大学教授）、
澤 和樹（東京芸術大学教授）、毛利伯郎（桐朋学園大学教授）
箕口一美（トリトン・アーツ・ネットワーク ディレクター）

<後援>： 在ベトナム日本国大使館、在ホーチミン日本国総領事館

ツアー・スケジュール

12月20日、21日 終日民音スタジオにてリハーサル

12月22日(金) 18:25 成田発 (NH931 便)
23:00 ホーチミン・タンソニャット空港着

12月23日(土) 09:30 ホーチミン発 (VN214)
11:30 ハノイ・ノイバイ空港着
14:45 ホテル発 (徒歩 15 分) ハノイ国立音楽院着
15:00~18:00 ハノイ国立音楽院の演奏家と合同リハーサル
19:00 在ベトナム日本国大使公邸着
大使公邸にて夕食会 (一部演奏披露)

12月24日(日) 09:15 ハノイ国立音楽院着
09:15~12:00 アンサンブル別にリハーサル
12:00 ハノイ国立音楽院の演奏家と昼食・打合せ
13:00~15:00 合同リハーサル
15:00~18:00 アンサンブル別にリハーサル

12月25日(月) ホテルにて各自個人練習
13:00 Hoa Binh 省 Tay Bac 文化芸術学院着 会場設定・リハーサル
15:00 学校訪問コンサート① Hoa Binh 省 Tay Bac 文化芸術学院
16:30 学校訪問コンサート② Hoa Binh 省 Tay Bac 文化芸術学院
18:35 コンサート終了

12月26日(火) 08:30 ハノイ市内 Nguyen Dinh Chieu 盲学校着 会場設定・リハーサル
10:15 児童 (視覚障害児童) による民族楽器演奏
10:30 学校訪問コンサート③ ハノイ市内 Nguyen Dinh Chieu 盲学校
11:30 コンサート終了後、校内見学
15:15 ハノイ国立音楽院到着
15:30~18:30 ステージ・リハーサル
20:00 ハノイ国立音楽院コンサート
22:40 コンサート終了

- 12月27日(水) 09:00 Thai Nguyen 省山岳少数民族寄宿学校着 会場設定・リハーサル
11:00 学生による民族音楽・舞踊披露
11:15 学校訪問コンサート④ Thai Nguyen 省山岳少数民族寄宿学校
12:15 コンサート終了後、校内見学
14:00 Thai Nguyen 省 Viet Bac 文化芸術学院着 会場設定・リハーサル
16:00 学校訪問コンサート⑤ Thai Nguyen 省 Viet Bac 文化芸術学院
17:30 学校訪問コンサート⑥ Thai Nguyen 省 Viet Bac 文化芸術学院
19:30 コンサート終了
21:00 ハノイ国立音楽院の演奏家たちと夕食
- 12月28日(木) 08:00 ハノイ発 (VN213 便)
10:00 ホーチミン・タンソニャット空港着
15:00 ホテル発 (徒歩 15 分) ホーチミン国立音楽院着
15:00~17:00 ホーチミン国立音楽院の演奏家と打合せ・合同リハーサル
17:00~19:00 アンサンブル別にリハーサル
- 12月29日(金) 午前中 ホーチミン市内観光 (戦争証跡博物館見学ほか)
15:15 ホーチミン国立音楽院着
15:30~18:30 ステージ・リハーサル
20:00 **ホーチミン国立音楽院コンサート**
22:00 コンサート終了
- 12月30日(土) 12:00 Binh Duong 省 Que Huong 孤児保護センター着 会場設定・リハーサル
14:00 児童による現代・伝統舞踊の披露
14:20 学校訪問コンサート⑦ Binh Duong 省 Que Huong 孤児保護センター
15:30 コンサート終了後、施設見学
17:00 ホーチミン市 Thu Duc 子供村着 会場設定・リハーサル
18:15 学校訪問コンサート⑧ ホーチミン市 Thu Duc 子供村
19:45 コンサート終了
23:55 ホーチミン・タンソニャット空港発 (NH932)
- 12月31日(日) 07:35 成田着 解散

宿泊先：

12月22日 Tan Son Nhat Hotel (200 Hoang Van Thu, Ward 9, Phu Nhuan Dist., HCMC)

12月23~27日 Hong Hai Hotel (260 Ton Duc Thang St., Hanoi)

12月28~30日 Cathay Hotel (131 Cach Mang Thang Tam St., Dist. 3, HCMC)

企画参加アーティスト

五嶋みどりーヴァイオリン

ミュージック・シェアリング理事長

小野明子ーヴァイオリン

英国メニューイン音楽院、ウィーン国立音楽大学・同大学院卒。メニューイン、パガニーニ、エリザベト王妃、ピオッティ・バルセシア等、数々の国際コンクールで優勝・入賞。世界各地で演活動を展開する傍ら、2004年秋から英国メニューイン音楽院の講師も務めている。また、(財)地域創造の公共ホール音楽活性化事業 2006年度～2007年度の登録アーティストにもなっている。

アンドリュー・ビア (Andrew Beer)ーヴィオラ

カナダ出身。ストーニ・ブルック大学を卒業後、ニュー・イングランド音楽院に進み、修士課程を修了。現在、同音楽院のグラデュエート・ディプロマ・コースに在籍中(ヴァイオリン専攻)。2004年に行われた9.11被害者支援コンサートに参加するなど、これまで音楽を通してのボランティア活動に積極的に参加している。

辻本 玲ーチェロ

11歳までアメリカ・フィラデルフィアで過ごし、7歳よりチェロを始める。2002年第5回ビバホールチェロコンクール特別賞受、2003年第72回日本音楽コンクール第2位、聴衆賞受賞。東京芸術大学音楽学部器楽科を首席で卒業し、全国各地でオーケストラ共演、リサイタルや室内楽コンサートに出演している。

ハノイ国立音楽院より参加：

Nguyen Thu Binhーヴァイオリン*

Phan To Trinhーヴァイオリン

Tran Thu Hienーヴィオラ

Nguyen Hong Anhーチェロ

全員ハノイ国立音楽院の卒業生。現在、ハノイ・フィルハーモニーのメンバーとして活躍中。



ホーチミン国立音楽院より参加：

Le Tri Toanーヴァイオリン

Le Minh Hienーヴァイオリン*

Bui Anh Sonーヴィオラ

Vu Thanh Haoーチェロ

全員ホーチミン国立音楽院の卒業生。現在、大学院生、同音楽院の教員として活躍中。

*このメンバーが、学校訪問コンサートで司会・通訳(英語ーベトナム語)を務めた。

各訪問校・施設での活動内容

1. [Hoa Binh 省 Tay Bac 文化芸術学院](#)

訪問日：2006年12月25日 学校訪問コンサート① 15:15-16:15

② 16:30-17:30

コンサート会場：階段式の大教室

来場者総数：約500人（第1公演目：約350人、第2公演目：約150人）

Hoa Binh 省 Tay Bac は、テイ族とムー族の居住地。この学校は文化情報省管轄の3つの学院のうちの一つで（2校目は12月27日に訪問した Thai Nguyen 省 Viet Bac の文化芸術学院、もう1校は Lac Lac というところにある）、ベトナム西部・北部の14省の子供たち（主にタイ族、ムー族、ザー族など）の教育を行っている。全校生徒1,000人。8歳～18歳の生徒たちが中学・高校・大学進学クラスに分かれて教育を受けている。1965年に文化芸術学校として創立。2005年に文化芸術学院に組織変更し、一昨年から17、18歳の生徒を受け入れるようになった。文部省規定の一般教育のほか、音楽・美術・舞踊を指導。卒業後はハノイ、ホーチミンなどの音楽院・大学に進学し出身地の文化情報局に勤務したり、他校の音楽教師、各種芸術団体に所属して活動。舞踊は伝統舞踊だけだが、音楽は西洋（ピアノ、ヴァイオリン、ギター、打楽器）と伝統楽器の両方を指導。生徒は学内の寮（学院裏手に100人収容の寮）か、市内の家庭にホームステイしている。



12月25日当日はハノイ市内出発が遅れ、学院到着は予定より1時間近く遅れた。また、到着時に、前日学院内の中庭で行われた職員家族の結婚式の片付けが済んでおらず、慌しい雰囲気の中、演奏の準備に取り掛かった。第1公演目は、ほぼ予定通りの時間に開始。学院側の説明によると、第1公演目の対象は主に音楽専攻の生徒、第2公演目はそれ以外の分野（舞踊、演劇等）専攻の生徒、ということであったが、第2公演目が待ちきれない他分野専攻の生徒たちも会場に集まったことで教室後ろ

には何重にも立ち見がでてしまい、部屋に入りきれない生徒たちが開け放された窓から覗き込む状態となった。

ツアー最初のコンサートということもあり、演奏メンバーの中には若干固さが見えたが（特に、司会・通訳をしてくれたハノイ音楽院の弦楽四重奏団1st ヴァイオリンの Binh さんは人前で話す経験が少なく、その上さらに当方のメンバーの通訳もこなさなければならなかったため、かなりの負担になってしまった）、演奏が終わる度に盛大な拍手を受け、徐々に固さも取れていった。但し、演奏家たちが西欧や日本で普段



経験しているコンサートの雰囲気と異なり、常に会場にしゃべり声が広がったままの状態での演奏をしなければならぬという状況に戸惑いを感じる演奏家もいた。

15分の休憩を挟んで始まった第2公演目は、予定されていた生徒の一部が第1公演に来場したため、客席は予定より少ない人数での開催となった（中には、第1公演目から続けて来場してくれた生徒もいた）。人数が少ない分、第1公演より客席前部は落ち着いた雰囲気での始まり（相変わらず、客席後方は立ち見の生徒達が入りし、最後まで落ち着かなかったが）、演奏家たちもざわざわした雰囲気に慣れてきていたようである。生徒たちの様子から察するに、おしゃべりしているのは、演奏を聴いていないのではなく、友達と感想を言い合いながら聴いているというようであり、「演奏中にしゃべることは、演奏者に対して失礼である」という考えや、「静かに聴く」という習慣がない中では寧ろ自然な反応とも捉えることができるのではと思った。

「ステージ上に変化を持たせ、客席後方の生徒たちにも近くで演奏を見てもらう」ということを考慮し、着席して演奏する弦楽四重奏作品のほかは、チェロ以外は立って演奏し、身軽に移動できる二重奏は客席中央で演奏した。

コンサート終了後、校長先生の案内で学校内を見学させていただいた。

この日の2公演を終えて、当方のメンバーから改善が必要な点として、以下の2点が挙げられた：

1. 慣れない司会・通訳をしている Binh さんのために、当方のメンバーとしてはゆっくりしゃべること、なるべく短い文章でこまめに通訳を入れてもらうよう心がける。
2. 途中でモーツァルトが2曲続くところ（付録①各公演プログラム参照）で、生徒たちの集中力が途切れる感じがしたので曲順を考え直す。

2. [Nguyen Dinh Chieu 盲学校](#)

訪問日：2009年12月26日午前 学校訪問コンサート③ 10:30-11:30

コンサート会場：講堂

来場者総数：約300人

翌12月26日朝に訪問したのは、ハノイ市内にある Nguyen Dinh Chieu 盲学校。全校生徒1,130人。6～15歳（日本でいう小中一貫校）。盲学校といっても、ほとんどの児童は健常児。1,130人中107人が視覚障害児（60%が全盲、40%が弱視）。視覚障害者には職業訓練も行っているため、視覚障害者の生徒には20歳の学生もいる。午前中は、健常児と視覚障害児と合同の授業。午後は別々に別れ、視覚障害児は午前中の授業の補足指導を受けたり職業訓練（調理、コンピューター入力など）を受ける。学校内には90人ほどの児童が寮生活をしている（もともと国内に盲学校が少なく、ハノイ市内以外に、北部の19省から親元を離れて寮生活をして学んでいる子供がほとんど）。また、視覚障害児の中には音楽的な感覚が優れている子供が多く、この学校でも11種類の楽器（伝統楽器も含む）の演奏指導も行っており、その演奏は高く評価されている。卒業生の中にはハノイ音楽院に進学し、音楽院卒業後は指導者としてこの学校に戻ってくる人もいる。



学校訪問コンサート第3公演目は、視覚障害児107名と健常児約200名の総勢約300名が講堂に集まり、8名の視覚障害児たちによるベトナム伝統楽器のアンサンブル演奏で始まった。ダンバウ（一弦琴）、フィムロン（シタールのような楽器）、ダンダイ（馬頭琴のような三弦楽器）、笛、打楽器などによるアンサンブルによって「浜辺の歌」やベトナムの伝統民謡など4曲が演奏された。

引き続き、校長先生のご紹介によってハノイ音楽院と当方のメンバーによるコンサートがスタートした。この日は、前日より対象児童の年齢が低いことを考慮して全体のプログラムを短縮し、口頭での楽器説明に続いて実際に児童たちに楽器に触れてもらう時間を取った。また、少しでも子供たちの近くで演奏をしたいという思いからステージを使わず、客席前方で演奏を行った。2日目ということで、Binhさんも司会・通訳に慣れてきたようで、トーク部分は前日よりスムーズに進行した。



8人の演奏メンバーが客席中に散らばって行った楽器体験は好評で、楽器の音に混じり、あちこちで歓声が上がった。児童が演奏家たちを身近に感じられたのと同様に、演奏メンバーにとっても、児童とのやり取りを通して演奏とトークだけでは埋められない演奏家と聴衆の間のギャップを埋めることができたようである（特に、当方のメンバーにとっては、トークは全て通訳を介さなければならず、楽器体験で直に児童と触れ合うことで距離感を縮められたようである）。しかし、児童たちの興奮が高まるにつれて順番を待ちきれない児童が演奏メンバーから楽器を奪おうとする場面が生

じ、そのためハノイ音楽院のメンバーの中には萎縮してしまった人もいた。また、児童たちの対応に追われたため、演奏メンバーの中に時間の感覚がなくなってしまい、必要以上に楽器体験時間が長くなってしまった結果、飽きた児童が講堂を出ていってしまったり、おしゃべりを始めたりと、收拾に手間取ってしまった（これは、その後、スタッフが客席全体の様子を見ながらタイムキーピングを行い、頃合を見計らって司会者に合図を送るということで改善した）。



できるだけ児童に近くで聴いてもらうため、試みとして客席前方で演奏を行ってみたが、これは、前の方の児童たちにとっては利点があったが、逆に後方の児童たちにとっては演奏家たちが見難くなってしまった。中には見えないことで興味を失ってしまう子供がいたことも事実である。さらに、常日頃からマイクを通した音（それも、かなりの音量による）に慣れてしまっていた児童たちにとって、静かにしなければ聴こえない生の音は集中力を持続させる上で支障になってしまったことも

否めない。ここでの経験を踏まえ、その後の会場ではできるだけステージを使用し、その代わり児童・生徒をできるだけステージに近付けて座らせるようにした。

また、この公演にはベトナム国営放送とハノイ市のテレビ局の取材が入ったが、こちらからの再三の注意にも関わらず、カメラマンが児童の周りを歩き回ってしまったことも児童たちの気を逸らせる一因になってしまったと思われる。さらに、コンサートを聴きにきていないクラスの児童たちが休憩時間になると講堂周辺の校庭で遊んでおり、空調のない講堂で窓を開けて行ったコンサートでは、講堂外から聴こえる歓声が一部の児童たちの演奏鑑賞の妨げになってしまったと思われる。残念ながら、ここでのコンサートは全公演の中で最も音楽鑑賞条件の悪いものとなってしまった。

3. ハノイ国立音楽院

公演日：12月26日 20:00 開演 22:40 終演

来場者総数：約 300 人



ハノイ国立音楽院でのコンサートは、音楽院の学生のための無料（クローズド）公演として行われ、盛況に終わった。しかし、演奏曲数が多すぎたため、翌日の授業の準備のために一部の学生がコンサート後半途中で帰宅してしまった。

また、この公演のステージ・リハーサルも含め、23日、24日に音楽院内で行われた全てのリハーサル（学校訪問コンサート用）は学生に公開していたが、ごく僅かの人数しか見学に来なかったのも非常に残念に思

う（クリスマス直前という時期的なものが最大の原因と思われる）。

4. [Thai Nguyen 省山岳少数民族寄宿学校](#)

訪問日：2006年12月27日午前 学校訪問コンサート④ 11:00-12:00

コンサート会場：講堂

来場者総数：約800人



1957年に創立され、今年創立50周年を迎える Thai Nguyen 省山岳少数民族寄宿学校は、ベトナム中部・北部の山岳少数民族の子供たちの教育のために作られた学校。総児童数2,000人(39クラス)で、現在のところ32の少数民族の子供たちが勉強している。中心は中学・高校生で、大学進学のための特別クラスもある。特に、一昨年から、これまでに大学進学者がいなかった5つの少数民族から大学進学者を出すための特別指導が

始められた。この特別指導を受けているのは地方の少数民族学校を卒業してきた学生たちである。

全員が寮生活を送っており、休暇に入ると学校のバスなどでそれぞれの出身地・家族のもとに送り届けられている。午前中は文部省規定の一般教育、午後は文化芸術教育を行っている（歌、舞踊、伝統楽器）。基本的な教育方針として、基礎となる一般教育を行いつつも、それぞれの民族の特色・個性を大事にし、それぞれの民族の伝統芸術を継承し、後世へ伝えていける人材を育てている。とはいえ、それぞれの民族で言葉の生活習慣も違い、なかなか苦労しているようである（中には、部族の習慣として10代で結婚・妊娠を強制され、現在出産をひかえながら学んでいる学生もいる）。

これまで外国人の訪問を受けたことがないというこの学校では大勢の学生たちの盛大な出迎えを受けた。そのまま直接演奏会場の講堂に向かいコンサートの準備を始めたが、待ちきれない学生たちが我先にと講堂に駆けつけてしまい、一時大混乱に。講堂入口や窓、ステージ脇のドアから学生たちが覗き込む中、会場設定とリハーサルを行う。かなり広い講堂であったので、演奏メンバーから「ステージ上ではなく、客席前方で演奏をしたい」というリクエストが出たが、学校側に確認したところ、なるべく多くの学生たちにコンサートを聴かせたいため、ステージぎりぎりまで座らせたこととすることで、バルトークのデュオ以外は全てステージで演奏することに決定。



コンサートは、まず学校側の伝統音楽と舞踊の披露（モン族の笛、テイ族の弾き歌い、ザオ族の伝統舞踊）で始まった。当方のアンサンブル・メンバーにとっては、ベトナム到着後もなかなか伝統音楽・芸能に触れる機会に出会えずにいたので、このデモンストレーションは大変貴重な機会となった。

引き続き行われた学校訪問コンサートは、対象となる生徒の年齢が前日の Nguyen Dinh Chieu 盲学校に近いということで、短縮バージョンに楽器体験を加えた形で行われた。前回の楽器体験では、殺到する子供たちに腰が引けてしまっていたハノイ音楽院のメンバーも、この日はだいぶ積極的に子供たちの中に入っていきえるようになっていた。800人という大人数のわりには会場の音響が良かったこともあり、かなりの集中力でコンサートを聴いてもらうことができた。また、伝統楽器を演奏する生徒が多いせいも、質疑応答のコーナーでは生徒たちから日々の練習時間や楽器についてなど多数の質問が寄せられた。



5. [Thai Nguyen 省 Viet Bac 文化芸術学院](#)

訪問日：2009年12月27日午後 学校訪問コンサート⑤ 16:00-17:00

⑥ 17:15-18:15

コンサート会場：階段式の大教室

来場者総数：約600人（第1公演目：約400人、第2公演目：約200人）

Thai Nguyen 省 Viet Bac は、もともと主にタイ族の居住地である。この学院は1960年に文化情報省管轄の文化芸術学校として設立(全国に3校あり、ツアー初日に訪問した Hoa Binh 省 Thai Bac 文化芸術学院もそのうちの1校)。創立45周年を迎えた2005年7月に、文化芸術学院に組織変更。“学校”時代は、ベトナム中部・北部の6省(県)の生徒の教育機関だったが、“学院”となり管轄する省が11に増えた。生徒の年齢は13~35歳。全校生徒の70%は少数民族。年齢の低い生徒達は歌手・俳優・舞踏家になるための教育を受け、年齢が上の生徒は、大学進学、及び、各地方の官僚となるための特別教育を受けている。総生徒数は1000人。そのうちの600人は正規の生徒で、残りの400人は日本での“社会人学生”のように、仕事をしながら通っている。文化芸術分野での指導内容は、音楽(西洋・伝統)、舞踊、美術と司書である。



連日のハード・スケジュールで、ハノイ音楽院のメンバー、我々メンバーにもかなり疲労が見られたので、Viet Bac 文化芸術学院でのリハーサルは軽めにし、開演時間まで休憩時間とした(コンサート準備中に市内で大規模な停電になってしまい、学院内も電気が不通になってしまったということもある)。

開演時間直前に停電が復旧し、予定通りの時間にコンサートを開始することができた。今回は、初日と同じ文化芸術学院で、学生たちの年齢も中高生ということ、比較的集中力が高そうな雰囲気であったこと、また、1割程度の学生がモーツァルトを知っているということで、これまで取り止めていたモーツァルトのデュオを取り上げ、また、簡単なメロディーを使って“ロンド形式”の説明も行うなど、少し専門的な話題を取り入れてみた。



こちらの学院でも、第2公演目に来る予定になっていた学生たちが待ちきれずに第1公演目に来場したため、客席後ろには大勢の立ち見が出た（従って、第2公演目は空席が目立った）。相変わらず、客席での話し声は絶えず（トークの間は比較的静かに聴いているが、演奏が始まった途端にざわざわとおしゃべりが始まるようであった）、コンサートの途中で何度も携帯電話が鳴ることがあったが、演奏メンバーもこのような状況には慣れてきたようで、構わずトーク・演奏を進められるようになっていた。ただ、前日までの反省点として、質疑応答のコーナー以外でも、できるだけ積極的に学生たちに話しかけ、質問を促すようにする（ただ聴いているだけの状態を改善するため）という提案が当方メンバーから挙げられていたが、マイクを通してのコミュニケーションに慣れていなかった Binh さんにとってはなかなか急にできることではなく、不自然なタイミングで学生に質問をさせてしまい、全体の流れが途切れてしまうような場面があった。

演奏のリハーサルも当然重要であるが、同時に、トーク内容の検証、トークの練習などを行っておく必要があったと痛感した（英語力の違いで、司会・通訳が Binh さん一人に集中してしまったのも問題であったと思われる）。

6. ホーチミン国立音楽院

公演日：12月29日 20:00 開演 22:00 終演

来場者総数：約 350 人

音楽院の事務局と音楽院演奏メンバーとの間の連絡ミスで、リハーサル初日にはメンバー4人のうちの2人（1st ヴァイオリンとチェロ）しか集まれず、共演できる演奏曲目が大幅に減ってしまったのが残念だが（付録①各公演プログラム参照）、それぞれのグループが用意してきた作品で、コンサート・プログラムとしては充実したものを作ることができた（コーディネーターのベトナム文化情報省舞台芸術局のツアー同行スタッフから、ハノイ国立音楽院でのコンサートがベトナム人にとっては長すぎたという助言をいただき、この夜のコンサートは2時間のプログラムに収めた）。特に、当方の弦楽四重奏団は、初顔合わせから10日という短期間であったが、ますます息が違ってきて素晴らしい演奏を披露してくれた。

当初、このコンサートは音楽院側からの提案でホール2階席を音楽院の学生に無料開放し、1階席を一般に販売。その売上は、翌日に訪問する孤児院に寄付するというアレンジメントで行うことになっていたが、ベトナムに向けて日本を経つ前日になってチケット販売は中止（全て招待券扱い）に変更されていたことが判明。Hoang Diep 副学長によると、招待券は全て出払い満席になるという話であったが、実際にはかなり空席が目立つコンサートになってしまったのが大変残念に思われた。



7. Binh Duong 省 Que Huong 孤児保護センター

訪問日：2006年12月30日 学校訪問コンサート⑦ 14:00-15:00

コンサート会場：舞台付の大教室
来場者総数：約200人

Binh Duong 省 Que Huong 孤児保護センターは NGO 組織で、ご自身も孤児であった Huynh さんという女性（センターのディレクター。訪問時不在。）が始めた孤児・障害児の保護センター。台湾を中心とした企業からの支援と、センター内で製造しているミネラル・ウォーターの販売（センター周辺は、ここ 10 年くらいに急速に発展してきた工業地帯で、近隣の複数の企業が定期購入を契約している）からの売上で運営されている。Binh Duong 省社会福祉局からは、“肢体不自由児の施設”として紹介されてきたが、心身障害のない孤児も多数保護されていた（ベトナムでは、障害を持った子供の多くは、生まれた時に親に捨てられてしまうため、ほとんどが孤児としてこのような施設で育てられている。また、10代の女子による妊娠・出産も急増しており、その多くは障害の有無に関わらず、出産直後に母親に病院に置き去りにされて孤児となっている。）。ここでは、現在 0～14 歳の子供たち 114 人が保護されており、20 人ほどのスタッフ（中には、4 名の全盲のスタッフも含まれる）が一般教育や職業訓練を行っている。



近隣にも 4 つの孤児院があるということで近隣の施設から子供たちを連れてきていただいた。最初は（会場に入りきらないということで）一部の子供たちを外のテントに座らせて音だけ聴かせるということで外にテントが用意されていたが、演奏家たちと子供たちが直接顔を見られるようにしたいとお願いし、全員を会場に入れていただいた。200 人ほどの子供たちが会場の

壁ぎりぎりまで詰めて入ったが、2-3 人の子供たち（5 歳前後）がステージと客席を行き来する以外は、全員比較的大人しく聴いてくれた（おやつとしてスナック菓子が配られていたようである）。

コンサート会場は比較的最近建てられた建物の中にあっただが、エアコンがなく、扇風機だけ。窓を開けたが、近くを幹線道路が通っているためにトラックの騒音が気になった。しかし子供たちには聞き慣れた音のようで気にする様子は見られなかった。センターの 7-8 歳の女の子達による踊り（クリスマス・ソングにあわせたものと、民族衣装のアオザイに着替えた伝統舞踊らしきもの）がまず披露され、コンサートがスタートした。





今回は、ホーチミン音楽院の弦楽四重奏団の2nd ヴァイオリンの Minh Hien さんに司会・通訳をお願いした。ご自身も既にお子さんをお持ちとのことで、子供に話しかけるのは慣れていらっしゃり、トークの部分はかなり改善された。ここでも楽器体験を行ったが、会場が狭く、混乱する恐れがあったので、今回は代表の子供たち数名にステージの方に出てきてもらって体験する方法を取った。ただ、この日が初体験となったホーチミン音楽院のメンバーにとっては自分の楽器を子供たちに触らせることにはかなり抵抗があったようで、音楽院のメンバーは子供たちと話しをするだけや、楽器をただ見せて廻るだけになった。また、あまり大きな会場ではなかったので音響的に特に問題はなかったが、コンサート直前までスピーカーを通した大音量の音楽を聴かされていた子供たちにとってはマイクを通さない生の音はかなり小さく感じられたようである（コンサート冒頭で、会場

後方にいたセンターのスタッフたちが、「聴こえない」といってしばらくざわつくような瞬間があった）。耳が慣れるまで最初の演奏でマイクを使うことも考えたが、セッティングが間に合わないままコンサートが始まってしまった。



日本で行われるコンサート（学校等で行われるものも含め）に比べれば、遥かに騒々しい会場ではあったが、司会をつとめた Minh Hien さんが、子供たちの様子を見ながら適宜質問を投げかけたりして子供たちの注意を逸らさないよう工夫してくれた結果、最後まで子供たちの関心をつなぐことができた。最後に、視覚障害をもった男の子がお礼にモーツァルトを演奏すると言ってくれて、伝統楽器の横笛で「春の歌」を披露。コンサートは終了した。

コンサート終了後、施設内を見学させていただいた。

8. [ホーチミン市 Thu Duc 子供村](#)

訪問日：2006年12月30日夕方 学校訪問コンサート⑧ 18:15-19:15

コンサート会場：施設内の講堂

来場者総数：約300人

Thu Duc 子供村は歴史が古く、フランス占領下時代から、小さな孤児院として細々と運営されてきた。画家ピカソの孫娘のマリナ・ピカソ (Marina Picasso) から多額の寄付を基に施設を拡大。現在は、ホーチミン市社会福祉局の管轄となっており、0～20歳までの孤児が、昼間は近隣の学校や職場に通い、夕方子供村に帰ってきて共同生活をしている（身体障害児はなく、知的障害を持った子供が僅かにいる）。マリナ・ピカソの寄付金で建てられた25棟の住宅（施設裏の敷地に点在）それぞれに母親代わりの女性が1人ずつ住んでおり、それぞれの女性が10名前後の子供たちの面倒を見ている。現在は、230人の子供・青少年が暮らしており、中心は6～15歳。ここでも、未成年・未婚の女子が出産し、女子自身に子供を育てる意欲・力がなく病院に置き去りにされた子供たちが保護されている。政府が窓口となって養子先を探す間の数ヶ月を病院で過ごし、引き取り手のいなかった乳幼児が多数この施設に預けられている。



昨年9月に下見した際、年齢の小さな子供たちは静かにコンサートを聴けないかもしれないということだったが、年齢に関わらず、興味を持ってきている子供たちは会場に連れてきてくださるようお願いした。小さな子供たちには小さな椅子を用意していただき、客席前のスペースに“かぶりつき”の状態で座ってもらった。これが予想外に効果を発揮し、最前列の小さな子供たちは身動きもせずにステージ上での展開に見入っていた。

この会場にはスペース的にゆとりがあったので、Que Huong 孤児保護教育センターと同様に、近隣の孤児院からも30名近い子供たちを連れてきていただいた。およそ300人の子供たちが集まったが、客席の大人の人数（Thu Duc 村で母親代わりをしているスタッフ女性等）が多かったせいか、これまでになく静かに終始落ち着いた雰囲気の中でコンサートを聴いてくれた。また、ツアー初日に舞台芸術局の同行スタッフから提案されていたが用意する時間がなかったクリスマスの音楽（「きよしこの夜」）を急遽演奏。一緒に口ずさむ子供たちがいて、さらに会場の雰囲気が和んだ。静かで落ち着いた雰囲気に演奏家達も普段の調子を取り戻したようで、演奏側にとっても聴衆側にとっても最良のコンサートになったと思える。



ここでもまた、コンサート終了後の施設を案内していただき、講堂裏手の敷地に点在する“家”のうちの、乳幼児たちが暮らす棟を見学させていただいた。

写真：小田哲明

今後の課題

初の試みを終えて、さまざまな問題点が見えてきた。今後、引き続きこのプログラムを実施していくにあたり、以下の点についての改善が必要と思われる。

1. “コミュニティー・エンゲージメント・プログラム”という名の下、アウトリーチ活動のコンセプトをさらに推し進め、関わる人・団体・組織が積極的に協力しあった形を求めて展開した企画であったが、学校や施設に音楽家が出向いて子供たちに音楽を届けるという活動の土壌がない国では、我々が行おうとしていることをまず理解し、実行するのに精一杯で、そこにさらに“受取側・協力者側”からの提案を求めるのは現実的に難しいといことがよく分かった。今回同行してもらった音楽院の演奏家達には機会がある毎に意見やアイディアを求めてみたが、彼らからは、既に提示されている物事を消化し実施していくのが限界であると言われた。今回のツアーの体験を経て、彼らの思うこと、考えなどは、現在アンケート調査中である。
2. 演奏曲目については、当初の予定では、当方のメンバーと両音楽院のメンバーそれぞれで同じ作品を用意し、作品毎にメンバーを組み替えて演奏する予定でいた。しかし、演奏曲目の決定が遅れ、準備時間が足りなくなってしまうことや、グループごとの演奏技術レベルの差が予想以上に大きかったこともあり、共演できたのは2-3曲に限られてしまった。また、リハーサルを進め方が当方のメンバーがリードする（特に五嶋みどり）形になってしまったため、音楽院のメンバーに当方のメンバーに対する遠慮が生じてしまい、一緒に食事をするなど打ち解けられる機会を作りたいが、最後まで“ツアー・メンバー同士”・“演奏家仲間”としてコミュニケーションが取れないままになってしまった。
3. 現地で行ったリハーサルでは、演奏のリハーサルにほとんどの時間を費やしてしまい、トークの内容の検討や練習ができないまま本番を向かえてしまったため、特に司会・通訳を担当したメンバーには大きな負担を課すこととなってしまった。また、当方のメンバーのトークは全て通訳を介する形になったが、そのために、生徒・児童と演奏家との距離がなかなか縮まらなかった（楽器体験を行った箇所を除く）。現地の言葉を話せない以上、通訳は必要であるが、例えば、トーク（プレゼンテーション）面でイラストや地図などを使うなどして、通訳を介さないコミュニケーション手段に工夫の余地があったように思う。
4. 演奏曲目については、当方のメンバーと両音楽院のメンバーに提案を依頼したが、特に音楽院側のメンバーには、間に音楽院事務局が連絡窓口として入っていたため直接演奏メンバーと連絡を取ることができず、こちらの意図が正確に伝わっていなかったようである。また、今回は準備期間が極端に短かったため、参加メンバー全員で話し合う（メール等で）機会が得られないまま時間切れとなってしまい、五嶋みどりと当方事務局で決定せざるをえなくなってしまった。さらに、ツアー最初に現地コーディネーターのベトナム文化情報省舞台芸術局のスタッフからクリスマス・シーズンにあわせてクリスマス・ソングの演奏を提案されていたが、最後の学校訪問コンサートまでそれを取り入れることができなかったのも、せつかくの“現地側”の提案をうまく生かせなかったという意味で残念に思われる。また、9月に行なった下見の時点で、現地コーディネーターや訪問先の学校職員から、「子供たちがよく知っている曲を演奏して欲しい」というリクエストを受け、両方の音楽院とベトナム国立交響楽団、知人のベトナム人ヴァイオリニストなどに楽譜の提供をお願いしたが、最後まで入手することができず、演奏曲目に取り入れられなかったのも残念である。次回は、事前に現地の作曲家に作曲・編曲を依頼する方向で検討している。

総合的見解

習慣の違い、説明・連絡不足、またやむをえない事情で予定外の出来事があったが、それを上回る数の予想外の嬉しい出来事もたくさんあった。我々の到着を心待ちにし、演奏家たちの姿や、初めて触れる楽器に目を輝かせてくれた子供たちに出会えたことは、本当に大きな喜びであった。何よりも、今回のプログラムの成功は、現地コーディネーターのベトナム文化情報省舞台芸術局の負うところが多い。彼らの理解と熱意がなければ、今回のプログラムは実現できなかったことは確かである。今後もこのプログラムを継続していく上で、現地コーディネーターの存在と協力は必要不可欠であり、そのコーディネーター選びにプログラムの成功がかかっているといっても過言ではないと思う。

付録：① 各公演プログラム

学校訪問コンサート①&② Hoa Binh 省 Tay Bac 文化芸術学院 (12月25日訪問)

トーク：ハノイ国立音楽院のメンバー紹介 (Binh)

演奏1. アンダーソン：シンコペーティッド・クロック (ハノイ・メンバー)

トーク：日本からのメンバーの紹介 (五嶋+Binh)

演奏2. ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲 第12番 作品96「アメリカ」より
第1楽章 (日本からのメンバー)

トーク：楽器紹介 (小野+Binh)

演奏3. バルトーク：44のデュオより Nos.1, 35, 21, 42, 36 (五嶋・小野)

トーク：モーツァルトの紹介 (Beer+Binh)

演奏4. モーツァルト：ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲第1番より
第1楽章 (五嶋・Beer)

トーク：舞曲“メヌエット”について (辻本+Binh)

演奏5. モーツァルト：弦楽四重奏曲 ト長調 K.387より
第2楽章 (日本からのメンバー)

トーク：舞曲“ワルツ”について (Binh)

演奏6. チャイコフスキー：花のワルツ (ハノイ・メンバー)

質疑応答

トーク：音楽と感情表現について (五嶋+Binh)

演奏7. バッハ：2つのヴァイオリンのための協奏曲ニ短調 BWV.1043より
第1楽章 (合同演奏)
(約60分)

学校訪問コンサート③ ハノイ市 Nguyen Dinh Chieu 盲学校 (12月26日訪問)

学校訪問コンサート④ Thai Nguyen 省山岳少数民族寄宿学校 (12月27日訪問)

演奏1. バッハ：2つのヴァイオリンのための協奏曲ニ短調 BWV.1043より
第1楽章 (合同演奏)

トーク：演奏メンバーの紹介 (Binh) +ドヴォルザークの紹介 (五嶋+Binh)

演奏2. ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲 第12番 作品96「アメリカ」より
第3楽章 (日本からのメンバー)

トーク：楽器紹介 (小野+Binh)

演奏3. バルトーク：44のデュオより Nos.1, 42 (五嶋・小野)

トーク&楽器体験

演奏4. チャイコフスキー：花のワルツ (ハノイ・メンバー)

質疑応答

演奏5. アンダーソン：プリンク・プランク・プランク (合同演奏)
(約45分)

学校訪問コンサート⑤&⑥ Thai Nguyen 省 Viet Bac 文化芸術学院 (12月27日訪問)

トーク：ハノイ国立音楽院のメンバー紹介 (Binh)

演奏1. アンダーソン：シンコペーティッド・クロック (ハノイ・メンバー)

トーク：日本からのメンバーの紹介 (五嶋+Binh)

演奏2. ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲 第12番 作品96「アメリカ」より
第1楽章 (日本からのメンバー)

トーク：楽器紹介 (小野+Binh)

演奏3. バルトーク：44のデュオより Nos.1, 35, 21, 42, 36 (五嶋・小野)

トーク：モーツァルトの紹介 (Beer+Binh)

演奏4. モーツァルト：ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲第1番より
第1楽章 (五嶋・Beer)

トーク：舞曲“メヌエット”について (辻本+Binh)

演奏5. モーツァルト：弦楽四重奏曲 ト長調 K.387 より
第2楽章 (日本からのメンバー)

トーク：舞曲“ワルツ”について (Binh)

演奏6. チャイコフスキー：花のワルツ (ハノイ・メンバー)

質疑応答

トーク：音楽と感情表現について (五嶋+Binh)

演奏7. アンダーソン：プリンク・プランク・プランク (合同演奏)

(約60分)

学校訪問コンサート⑦ Hoa Binh 省 Que Huong 孤児保護教育センター (12月30日訪問)

学校訪問コンサート⑧ ホーチミン市 Thu Duc 子供村 (12月30日訪問)

トーク：ホーチミン国立音楽院のメンバー紹介 (Minh Hien)

演奏1. チャイコフスキー：バレエ「くるみ割り人形」より
葦笛の踊り (ホーチミン・メンバー)

トーク：日本からのメンバー紹介 (Minh Hien)

演奏2. モーツァルト：弦楽四重奏曲 ト長調 K.387 より
第1楽章 (日本からのメンバー)

トーク：楽器紹介 (小野+Minh Hien)

演奏3. バルトーク：44のデュオより Nos.1, 42 (五嶋・小野)

トーク&楽器体験

演奏4. ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲 第12番 作品96「アメリカ」より
第4楽章 (日本からのメンバー)

質疑応答

演奏5. アンダーソン：プリンク・プランク・プランク (合同演奏)

(約45分)

ハノイ国立音楽院コンサート (12月26日)

1. モーツァルト：弦楽四重奏曲ト長調 K.387 (日本からのメンバー)
 2. アンダーソン：シンコペーティッド・クロック (ハノイ・メンバー)
 3. チャイコフスキー：花のワルツ (ハノイ・メンバー)
 4. アンダーソン：馬と馬車 (ハノイ・メンバー)
 5. バッハ：2つのヴァイオリンのための協奏曲ニ短調 BWV.1043 (合同演奏)
- 《休憩》
6. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第3番 BWV.1006 (五嶋)
 7. シューベルト：弦楽三重奏曲変ロ長調 D.581 (小野・Beer・辻本)
 8. ドヴォルザーク：ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲 第12番 作品96「アメリカ」
(日本からのメンバー)

《アンコール》

アンダーソン：プリンク・プランク・プランク

ホーチミン国立音楽院コンサート (12月29日)

1. モーツァルト：弦楽四重奏曲ト長調 K.387 (Toan・小野・Beer・Hao)
 2. シューベルト：弦楽三重奏曲変ロ長調 D.581 (小野・Beer・辻本)
 3. チャイコフスキー：バレエ「くるみ割り人形」より 葦笛の踊り (ホーチミン・メンバー)
 4. チャイコフスキー：アンダンテ・カンタービレ (合同演奏)
- 《休憩》
5. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第3番 BWV.1006 (五嶋)
 6. バッヘルベル：カノン (ホーチミン・メンバー)
 7. ドヴォルザーク：ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲 第12番 作品96「アメリカ」
(日本からのメンバー)

《アンコール》

アンダーソン：プリンク・プランク・プランク

付録：② 記事掲載紙一覧

ベトナム国内

12月21日掲載

Le Courrier du Vietnam (フランス語新聞)

Lao Dong (労働者新聞)

12月22日掲載

The Thao&Van Hoa (スポーツ&カルチャー紙)

Van Hoa (カルチャー紙)

Thanh Nien (青少年新聞)

Vietnam News (英字新聞) ネット配信有り

Thoi Bao Tai Chinh (経済新聞)

Hoi Lien Hiep Phu Nu Viet Nam (ベトナム女性連盟ネット配信)

12月23日掲載

Thanh Nien (青少年新聞)

Nhan Dan (人民新聞)

12月24日掲載

Quan Doi Nhan Dan (人民軍新聞)

Nguoi Lao Dong (労働者新聞)

12月25日掲載

Du Lich (観光業界新聞)

An Ninh Thu Do (首都保険新聞)

Tuoi Tre Thu Do (首都青少年新聞)

12月27日掲載

Phu Nu Thu Do (首都女性新聞)

(2007年1月22日現在)

テレビ局：

ベトナム国営放送 (12月26日 Nguyen Dinh Chieu 盲学校取材、ハノイ国立音楽院コンサート一部収録ー同日と翌日のニュース番組で放送)

ハノイ市放送局 (12月26日 Nguyen Dinh Chieu 盲学校取材ー同日午後のニュース番組で放送)

日本

共同通信ベトナム支局が12月26日 Nguyen Dinh Chieu 盲学校取材。掲載紙 (ネット配信含む) は以下の通り：

秋田魁新報社、茨城新聞、岩手日報、北日本新聞、岐阜新聞、京都新聞、熊本日日新聞、神戸新聞、佐賀新聞、山陰中央新報、山陽新聞、四国新聞、下野新聞、千葉日報、中国新聞、デーリー東北新聞、東奥日報、徳島新聞、西日本新聞、日本経済新聞、山梨日日新聞、goo ニュース、infoseek 楽天ニュース